

## 音楽聴取における情動体験と表現

永岡 都 (昭和女子大学)

---

音楽を聴いて気持ちが高揚したり、物悲しい気分になったとき、我々はその間に感情(情動)が生じたように感じるが、それは日常生活の中で我々が感じる感情と同じなのだろうか。また、鳴り響いている音楽それ自体が「感情を表現しているように」聴こえるのはなぜだろうか。あるいは、実生活では好ましいとはいえない「悲しみ」や「苦悩」といった感情が、音楽作品の中に表現されると、作品の享受という「快」の体験に変わるのはなぜだろうか。

これらの問いに真摯に答えること——とりわけ最後のような問いに対して安易に「美的体験」という言葉を持ち出したり、また全ての問いに対して「音楽における感情は特殊音楽的なものである」という一文で片づけたりすることなく、——音楽と情動という2つの「心的状態・心的過程」に共通するものを見出し、音楽の表現の本質を解き明かそうとする気運が、1980年代から英米の音楽哲学者たちの間で高まっている。

音楽による感情表現については、「曲の中に表現されているのは作曲家の感情である」とする「表出理論」と「音楽の中に聞こえる感情は聴き手の感情である」とする「喚起理論」の2つの立場が古くから対立してきた。これに対し、デイヴィスは「音楽とは情動の性質を示す」つまり、音楽自身のサウンドの質に表現性があるという新たな解釈を示した。

ここでは、「音楽と感情」というテーマを、音楽聴取における情動体験の解釈に焦点化し、諸芸術の中でも特に感情と関連の深い音楽の表現形式について考察していく。主要なトピックスは、今日の音楽的感情論争の中心にいるレヴィンソン、キヴィ、デイヴィスの3人の音楽論の比較である。まずレヴィンソンは、音楽によって聴き手に引き起こされる感情を、純粹に生理的で情緒的な連想感情 *associated feeling* と見做し、様々な認知過程がそこに関連付けられるとする。一方、キヴィは、音楽に感動するとか、音楽を楽しむといった感情の実体を独自の視点から追求する。また、デイヴィスは「音楽は情動の性質 *property* を顕す」、すなわち音楽は情動の性質を目に見える形で表示すると主張した。

それぞれの聴取モデルを比較し、互いの関連をチャート化して論点を整理してみると、聴き手にとってよりリアルな形で音楽体験を描出する可能性は、レヴィンソンが提示したモデルを理論化する方向に見えてくるように思われる。本シンポジウムでは、従来の研究で看過されてきた伝統音楽や現代音楽における感情と表現の問題も含め、芸術と感情の諸問題に音楽ならではの切り口でアプローチしたいと考える。